

註

- (1) 目次の一から五にあたる部分と、六、七にあたる箇所は、「ジュリアン・グリーンの出発(一)(二)」として、山口大学「独仏文学」第二十二号(二〇〇一年二月)、および同「文学会志」第五十一卷(二〇〇一年二月)に発表。
- (2) 父エドワードは結婚後、ガス会社の社長になったりして、かなり裕福な家庭を築いた。だが一八九一年、株の暴落で破産に追いこまれ、「米南部綿実油」(Southern Cotton Seed Oil)という会社に職を得た。
- (3) 父親はヴァージニア州出身である。母のメアリはジョージア州サヴァナで生まれた。
- (4) 「内なる鏡」、「日記」第六卷、一九五一年七月三日、IV、一二三〇頁。
- (5) 「嵐の目」、「日記」第四卷、一九四三年十月十五日、IV、七五三頁。
- (6) へくはイタリック体で書かれていることを示す。
- (7) 「見えないものに向かって」、「日記」第八卷、V、二六三頁。なお、へくはイタリック体で書かれていることを示す。
- (8) へくは頭文字が大文字で書かれていることを示す。
- (9) 「暗い扉の前で」、「日記」第三卷、一九四〇年七月二十九日、IV、五二三頁。
- (10) Georges Poulet : *Mesure de l'instant, Etudes sur le temps humain*, t. IV, Plon, 1968, p.347.
- (11) J. Uijterwaal : *Julien Green, personnalité et création romanesque*, Van Gorcum & Cie, Assen, 1968, p.82.

た対立概念を意識のなかに生起させる。二元論的世界観は、八歳の頃からはじまる突然の幸福の体験によって堅固なものとなる。子ども時代のグリーンは、母親が存在するために、基本的には、自分が神の国のなかに位置すると思えたとしても、こうした二元論的世界観が、後年の彼の、苦渋にみちた人生をもたらす要因になったことは、贅言を要しない。

第三の要素は、孤独意識である。孤独感は、もつとも早い時期の、はじめて自我を意識した体験によって芽生え、アメリカ国籍に起因する異邦人意識、ならびに南部意識、さらに純粹志向を有することによっていやました。孤独意識はグリーンの場合、終生解消することはなく、彼の作品にも反映することになる。

第四の要素は、目に見えるものの誘惑である。子ども時代のグリーンが母に守られて、幸福で平安な日々を送ったとしても、不安な要素も認められる。この要素がそれである。ギュスターヴ・ドレの版画、「凶報の使者たち」の絵、ルーヴル美術館の彫像を鑑賞することによって、グリーンは美、人間の肉体の美しさを知った。これらの作品がグリーン的美意識をやしない、同性愛の性向の生成に関与したという点も看過できないとはいえ、彼が美（の発見）をとおして、目に見えるものの誘惑をうけ、地上的なものに目を見開かされたという事実が大事であろう。この事実が、地上の国に向かう道がすでに幼年時代から切り開かれていたことを物語っている。

グリーンの後年の生の歩みに影響をおよぼす要素として、四つの観点から、彼の子ども時代、彼の人生の出発を特徴づけるものをとらえた。母親の死後、グリーンは、神の国への道と地上の国への道という、二つの異なった方向に向かう道の前に立たされる。これが自伝第二巻『開かれた千の道』の主題である。大ざっぱに言えば、グリーンは神の国にあこがれつつも、地上の国のほうに向かう。自伝の後半の『遙かな土地』と『青春』で告白される、ヴァージニア大学留学時代の、学友マークへの不可能な愛の体験と、帰仏後のパリでの、苦渋にみちた肉体生活がそのことを端的に示している。母親の他界のちのグリーンの生の歩みをたどること、『夜明け前の出発』につづく彼の自伝を吟味すること、これを今後の課題としたい。

なことがらにたいして厳格な人であった。しかし母のそばにいて、ともかくグリーンは至福と安全と平和が保証された。何よりもまず、グリーンは母の熱烈な愛につつまれて成長してきた。母とともに生きることが、神の国にすることに等しかった。その母を喪失することで、グリーンが神の国から追放されたような印象を受けることは、容易に推察される。母の死に際してグリーンがいだいた、「神さま、(…)私はあなたの存在も、あなたのやさしさも感じなかった」という先の感懐は、グリーンが樂園追放の体験をしたことを明示している。

十一 おわりに

以上、自伝第一巻『夜明け前の出発』を検討の主な材料にしながら、グリーンが理解しようとした、彼の子ども時代の内面的な生を素描してきた。グリーンの人生の出発は、いかなるものであったのか。ここでそれを要約しておきたい。概括的に言えば、グリーンの子どもの時代において、彼の人生を方向または決定づけた要素が四つ見いだされると思う。その第一は、神への信仰である。グリーンの中かで、かの存在の愛を希求する部分は、もともと幼い頃の、星空の観照の体験によって形成され、母親の宗教教育によってはぐくまれた。グリーンが幼児期から信仰を培ったことは、彼のその後の人生に影響を与える最大の要素である。

第二の要素は、二元論的な世界観である。星空の観照の体験を分析したとき指摘したように、グリーンは *visionnaire* 的な資質の持ち主である。この資質はグリーンに、かの愛の存在だけではなく、悪魔・幽霊をも感知させた。グリーンは目に見えるものの背後に、目に見えないものが隠れていることを、早くから承知していた。そして母親の厳格な性教育によって、純粹志向が培養された。かくして、目に見えないものと目に見えるものとの対立に加えて、魂と肉体、純粹と不純との対立に立脚する世界観がかたち作られる。さらに、純粹志向が信仰に作用して、神の国と地上の国、善と悪、神と悪魔といっ

神さま、あなたはあの時、どこにおられたのですか？ 私はあなたの存在も、あなたのやさしさも感じなかった。恐ろしい孤独のなかに、私は身を置いていた。悪魔的な機械が私を私じしんの中に閉じこめようとするかのように、周囲の空気を断ち切っているような気がした。というのも、私は苦しみあまり、息を詰まらせていたから。だが、泣いてはいなかった」(七九五頁)。

最初の段落では、母が世を去ることの苦しみが表明されている。「わたしには」わかった」(je compris)の繰り返し、および、「もせず」(sans)の反覆は、内心の苦悩を浮き彫りにしているし、さらに「この上もなく深い静寂」は、内なる悲しみをひき立たせている。グリーンは一貫して涙を流していない。とはいえ、このことは、グリーンが悲しんでいないということを意味するのではなく、逆に、悲しみが極限にまで達していて、泣くどころではないという状態を示唆している。二番目の段落の、「涙ははるかに超越していた」という言い方はその状態を言い表わしている。グリーンは、「私の中では、誰かが生まれつつあった」と書いている。この文は、一人の幸福な子どもが死ぬかわりに、苦しみと不幸を知る人間が誕生しつつあった、ということを意味する。しかもその誕生は、「絶望の中で」である。母と永遠に別れることでの「絶望」は、第三段落の、「神さま、あなたはあの時、どこにおられたのですか？」という問いかけとともに、「私はあなたの存在もあなたのやさしさも感じなかった」という感慨によって際立っている。グリーンは悲しさと「絶望」のあまり、神の不在を痛感するほどまでに、同じことであるが、神を見うしなうほどまでに、「恐ろしい孤独」のなかにおちいつている。この件りからは、母の永眠を前にしてのグリーンの衝撃の深さが看取される。

母の死の場面を概観した。母親の他界はグリーンの人生において、一つの転換点を印す事件であるとみることができ。先の引用文のなかの、「私の中では、誰かが生まれつつあった」との認識から明らかのように、この事件はひとつの時代の終わり、新たな生の始まりとを告げるものであった。幸せな子ども時代の終わりと、苦渋にみちた生の始まりとである。母親との別れはグリーンにとって、失楽園の体験と等価なものであったように思われる。なるほどグリーンの母親は肉体的

のに、食堂には誰一人いなかった。どうしたらよいのだろうか？　そのとき、私は肉体を持つということがどれほどまでにつらいことでありうるかを感じた」(V、七九四頁)。

グリーンは、「肉体を持つということがどれほどまでにつらいことでありうるか」(à quel point il peut être pénible d'avoir un corps)と言っている。この言い方は、母がたずかる見込みがないということを知ったときのグリーンの苦悩と悲嘆の念を見事に言い表わしている。この気持ちのために、自分の手足を、自分の肉体をどのようにあつかったらよいかわからないほど、グリーンは肉体をもてあましていたのであろう。あるいは見方を変えて、「肉体を持つ」という表現は、「人間として生きる」という言葉に言い換えられるようにも思われる。なぜなら、人間として生きるとは、肉体のなかで、あるいは肉体とともに生きることであり、人は肉体を所有してはじめて人間になれるからだ。だが人が肉体を持つかぎり、必ずその肉体が朽ち、滅びる瞬間が訪れる。最愛の母の死を間際にして、こうした人間の運命の悲しさを、グリーンは身に沁みて感じたのかもしれない。死ぬことを条件づけられた人間として存在することの苦しみをつくづく思い知らされたのであろう。「肉体を持つということがどれほどまでにつらいことでありうるか」という思いは、こうした悲しみと苦しみを集約しているとも解釈できる。

グリーンは医者と別れたあと、母を看取りに行こうとする。けれども母の部屋の入り口に立ったとき、母にわが子とのさいごの対面をさせるために、父親が子どもたちの名を一人ひとり呼ぶ声が聞こえてくる。いたたまれなくなったグリーンは姉アンヌの部屋に逃げこむ。アンヌの部屋で一人きりであるときのグリーンの心の動きを叙述した件りを読むことにしよう。「生まれてはじめて、苦しむことが何であるのかを、私は知った。私にはわかった。何もかもがわかった。身じろぎもせず、涙を流すこともせず、この上もなく深い静寂の中で、私は死の衝撃をうけた。

(…) 私の中では、誰かが生まれつつあった。それも涙の中ではなく。涙ははるかに超越していたから。そうではなくて、絶望の中であつた。

るといふ心地よい感覚^①」であると規定している。つまり、この感情が、「この世」（目に見えるもの）の背後に隠れた「目に見えない」ものを感知したことに立脚すると考察している。ジョルジュ・プーレ、ユイターヴァールの見解を受けいれると、グリーンが成人してから経験することになる不意の幸福感もまた、神秘的・宗教的なものであることになる。これらの経験は、ジャンソン校の教室での最初の体験に源を發しており、この八歳のときの体験が決定的・根源的なものであったことが再確認される。ただ、自伝において、母親の他界ののち、にわかに幸福感に來襲されて、地面をころげ回るといふ行為は影をひそめる。この事實は、母親がグリーン^②の幸福と平安とに大きな影響をおよぼす存在であったことを証^{あか}している。

十 母の死

今度は、自伝のなかで描出されている、母の死の場面を一瞥することにしよう。グリーン^③の母親は、一九一四年十二月二十七日に亡くなった。『夜明け前の出発』において、この日のことは、プレイアード版テキストで約五頁にわたって追想されている。長い文章なので、重要な箇所のみを抜粋したい。母が息をひきとろうとしている日の早朝、グリーンは生存のわずかな可能性を信じて、医者^④を呼びに行き、医者^⑤に家に来てもらう。次の場面は、その医者^⑥が臨終の床にある母親の部屋から出てくるところからはじまる。

「しばらくたって、私は、母の部屋から出てきた医師のあとを追って階段をおりた。ちょうど私たちが一緒に鉄格子の門のほうへ向かっているとき、医師は一種愛情のこもった荒々しさで、「ねえ、もうおしまいだ。もう希望はない」と言った。

私が鉄格子の門をあけると、医師は私の手を握った。私には、医師の言葉が何ひとつ理解できなかつた。誰のことを話しているのだろうか？ 私は家にもどつた。朝食をとるために、食卓の用意ができていた。しかし、もう八時だという

なつて寝ていた。すると突然、言うに言われぬ幸福の感情が私の全存在を襲つた。この世に重くのしかかる不吉な気配はもはやなく、いかなる悲しみも急に姿を消し、深い、まったく安心感に包まれて、すべてがよろこびの中で花開いてゐるかのように思われた」(V、八二五頁)。

戦争のために「不吉な気配」が周囲の世界にただよい、「悲しみ」がみなぎっているにもかかわらず、グリーンは突如として幸福感にとらえられ、「深い、まったく安心感」のなかで「よろこび」を味わっている。この体験も、ジャンソン校の教室でのそれと同じく、目に見える世界からの逸脱の体験であり、その瞬間、目に見えない世界、「この世」とはちがった「別の世界」が、平和と至福にみちた「別の世界」が開示される体験なのであろう。これもまた、神秘的・宗教的体験であると理解できる。

このように、グリーンは母親の死後も、突然の幸福を体験している。この体験はグリーンが大人になってからもなされ、「日記」のなかでは、繰り返し語られている。たとえば、一九三三年五月十日、同年十月二十八日、一九三四年三月二十九日、一九三五年三月二十日、同年四月三十日、一九三七年二月九日、同年六月九日、同じく七月十四日、一九三八年七月十八日、一九四〇年七月二十九日、一九四六年八月二日などの日付の「日記」では、突然の幸福感のことが披瀝されている。この中から、一つだけ紹介することにしよう。

「昨日、昔のように、幸福が不意に入ってきた。そしてそれは、ちよつとの間、静かで暗い大きな客間の中にとどまつた」。

ジョルジュ・プーレは、こうした幸福を問題にしつつ、「グリーン的幸福は、まさしくそれがもはや自然の世界ではない世界の装いをしてゐるがゆえに、超自然的な感動と定義される」と主張している。プーレの文脈にそくして把握すれば、グリーンにおける幸福とは、自然の世界ではなく超自然的な世界に没入することで得られるものである。ユイターヴァールは、グリーンの意味わう突然の幸福感を、「〈この世の厚みの背後〉に存在するはずの、表現しがたい、目に見えない何かに触れ

とつぶやく。ウィルフレッドはカトリック信者でありながらも、もっぱら肉体的な快楽を追いもとめる若者である。この若者にとって、愛は人間的なものである。だがウィルフレッドが「よろこび」のなかで「愛している！」とつぶやくとき、愛の対象は人間であると同時に神にもなりうると解釈された。ここでグリーンがいただいている愛も、似たような性質を帯びていると思われる。特定の対象をもたないこの愛は、ウィルフレッドの愛と同様に、官能的なものであると同時に霊的なものでもあり、人間にも、かの愛の存在にも向かう可能性をはらんでいるだろう。グリーンをとらえる歓喜は肉感的なものであるとはいえ、見方によれば、神の国とは言えないまでも、平安が保証された楽園的な場所に存在していることの実感に由来すると考えられる。この一節における幸福の体験もまた、欲望の著しい介入が観察されるとしても、やはり神秘的体験であると判定することができる。

グリーンの子ども時代における、突然の幸福の体験を瞥見してきた。八歳のときの、ジャンソン校の教室で急に幸福を感じた最初の体験がそうであったように、この体験は何よりもまず、目に見えない世界、ひいては神の国に参入するという宗教的体験である。しかし幸福感に支配されて、地面の上をころげまわるといふ後年のふるまいからは、欲望の揺れ動きも認められた。とはいえ、すでに論及したように、これらもまた、神秘的体験であることに変わりはない。このように、少年時代のグリーンが、急激な幸福感をたびたび経験しているという事実は、神の国に属する、というより、それを代表する母親の保護のもとに、彼が幸福で平和な日々をすごしていたことを察知させるし、また、グリーンにおける二元論的世界観が揺るぎがたいものになることを覗かせている。

もつとも、突然の幸福の体験は、グリーンの子ども時代だけに見られるものではない。母親の逝去ののちも、グリーンは同じような体験をしている。たとえば、『夜明け前の出発』のなかで、第一次大戦のさなかの一九一六年の思い出として、グリーンは眠られぬ一夜の至福の体験を伝えている。

「(…)ある夜、私は眠ることができなかつた。いつかその夜のことを、私は忘れられるだろうか？ 私はあお向けに

じているとき、肉体を超越するに至る。肉体の束縛から解脱したところで、あるいは、魂が肉体から解き放たれたところで、歓喜に酔いしれている。幸福が官能的な性質を帯びているとはいえ、ここでの幸福の体験もまた、神秘的なものである。キリスト教的であるとは規定できないとしても、やはり宗教的なものといえるだろう。

またグリーンは『夜明け前の出発』のなかで、一九一四年の春の、〈湖畔荘〉と名付けられた、ル・ヴェジネの家での幸福な日々を思い起こしている。

「前年の春と同様、一九一四年の春は、私の人生の中でもっとも幸福な春のひとつであった。〈湖畔荘⁽⁸⁾〉の庭で、私のよく知っている度を越したよろこびに駆られて、ふたたび私は草の上に身を投げ、ころげ回り、笑い声をあげながら手足をばたつかせるのだった。そうとは知らずに、私は愛していた。だが誰を愛していたのだろうか？ 私を半ば気違いにしてしまう、あの焼き尽くすような情熱を、誰と分かち持つというのだろうか？ 突然の欲望に私はすっかりとらえられるのだった。拷問の苦しみでもあれば恍惚とした喜びでもある、どうしてよいのかわからない欲望に」（V、七七三—七七四頁）。

グリーンは、いきなり「度を越したよろこび」に翻弄されて、「草の上に身を投げ、ころげ回」っている。ここでは、「あの焼き尽くすような情熱」(cette passion dévorante)とか、「突然の欲望」(un désir panique)とかいった表現が明瞭に示すように、グリーンを感じる「よろこび」はいっそう官能的な様相を呈している。グリーンは、この「よろこび」を純粋に肉体的な結果であり、いわば肉体的な高揚が彼の所作をひき起こしている。しかしながら、この「よろこび」を純粋に肉体的なものと割り切ることはまちがいであると思われる。というのも、グリーンは、「そうとは知らずに、私は愛していた」と打ち明けているからだ。なるほど、この愛は人間的なものである。しかしそれは神にも向かいうるものではないだろうか。この場面は、この小論の冒頭で検討したような、『人みな夜にあつて』の主人公ウィルフレッドが芝生に寝そべって、夜空を見ながら愛の衝動にかられる場面と類似性をもつようにみえる。ウィルフレッドは幾度となく、「愛している」(Je t'aime！)

とはいえ、同時に神秘的なものであると判断すべきであると思われる。

グリーンは十三、四歳のころ、今引用した一節でもそうであったように、しばしば、幸福を感じて、衝動的に地面の上をころげまわつたらしい。一九六一年三月二十二日付の『日記』には、「十三歳から十四歳の頃、幸福のあまり、幸福の（重荷）を背負う恐ろしさのあまり、叫びながら草の上をころげまわらせた、生きることのよろこび、筆舌につくせないよろこび」のことが言及されている。『夜明け前の出発』において、よろこびにとらえられて地面の上をころがる場面は、まだほかにも見いだされる。グリーンは、パリ郊外のル・ヴェジネに住んでいた一九一三年の春を、次のように追憶している。

「まだ大層明るいときに、私は家に帰った。木の葉におおわれた田園を見ると、突然のよろこびに襲われたものだ。木曜日の午後には、私は一種の声なき熱狂にとらえられて、庭の芝生の上をころげ回るのだった。何かが私の臓腑をしめつけ、草のなかに顔をうずめて、一人きりで笑うのだった。私はこれほどの幸福をどうしていいのかわからなかった。私はいかなる問いも自分に発しなかった。自分がどうして幸せなのか問うこともなかった。未知の力の重みで自分の全存在が押しつぶされそうになっていることに耐えていた。あおむけになって、光が洩れてくる、小さな無数の青白い木の葉のあいだから、空を眺めていた。もはや自分が自分じしんではなく、まさしく、目に入るものすべてになっているような気がした。私は空気であり、空間だった」（七五九頁）。

このテクストは難解である。けれども、グリーンが「突然のよろこび」に圧倒されて、「庭の芝生の上をころげ回」っていることは、一読して明白である。ここで問題になっている「よろこび」も、先の引用文におけるそれと同じように、肉感的な性格のものともみなしうる。「何かが私の臓腑をしめつけ」という文の中の「何か」とは、自覚されない欲望を指すと解せるからだ。また、グリーンの「全存在」を押しつぶしそうな「未知の力の重み」とは、發育ざかりの肉体の力の重圧のことであるとうけとれる。しかし、「もはや自分が自分じしんではなく、まさしく、目に入るものすべてになっているような気がした。私は空気であり、空間だった」というさいこの文章にも、是非とも注意を払うべきである。グリーンは幸福を感じ

教室で味わった幸福と同じように、周囲の、目に見える世界から離れて、「別の世界」、つまり目に見えない世界に参入した
ことにもとづくものではないのか。そのことで得られるよろこびは、「魂のあいだを通り抜けていく」と形容されていると
ころからわかるように、靈的なものである。したがって、ここでの幸福の体験もまた、神秘的・宗教的体験であると認定で
きる。

グリーンは自伝のなかで、このような体験につづく、アンドレイイでの思い出を、次のように披露している。

「(…) アンドレイイでの私は、何もへわかつて⁶⁾はいなかった。私がどのようにして生まれてきたか、級友が言った
言葉を忘れていた。おそらく私は、そんなことはほんとうでない、はなをすすっては胸をむかつかせるあの少年の、き
たならしい作り話だと思っていたのだろう。アンドレイイで私は、歯が痛くなるほどまでに幸せだった。私の言いたい
のは、生きることのよろこびが自分に襲いかかってきたとき、奥歯に、なんとも説明しがたい、甘美な、激しいむずが
ゆさを感じたということだ。私は氣違ひのように地面の上をころげまわった。跳びはねたり、歌ったりしなければ、田
舎の道を百歩も進むことはできなかつた」(七二〇頁)。

少年グリーンは幸福感、「生きる」ことのよろこび (la joie de vivre) に浸されて、「地面の上をころげまわった」り、
「跳びはねたり、歌ったり」して、田舎の道を歩いている。この生存の「よろこび」とは、いかなる性質のものなのであ
るか。地上的・肉体的なものなのか。グリーンが奥歯に「甘美な、激しいむずがゆさ」を覚えていることから、言いかえれ
ば、この「よろこび」が肉体的な感覚をともなっているという事実から、たしかに、ここでの幸福感には、官能的な要素が
混入しているとみることができるともいえない。しかし、はじめのほうで、「私がどのようにして生まれてきたか、級友が
言った言葉を忘れていた」と書かれている点に留意しなければならぬ。グリーンは肉欲の世界から遠ざかったところで、
悪から守られた安全な場所で、幸福を享受している。それゆえ、この幸福は地上の国で生きることの幸福というより、悪や
誘惑が排除された神の国に置かれたことからくる幸福だと解するのが妥当であろう。ここでの「よろこび」は肉感的である

というより、参入したことと対応している。それゆえ、この幸福の体験は、目に見えないものを感知するという体験でもあり、地上の国から神の国への帰還をうながし、あるいはもたらすような神秘的・宗教的体験であると論断しうる。この体験は、グリーンの人生のなかでもっとも早い時期の体験、すなわち、星空の観照によって〈愛〉を実感した体験に匹敵し、これと同程度に決定的・根源的なものである。

こののち、グリーンは、類似した体験をすることになる。たとえば、第五学級の頃、一家が休暇をすごすために借りたアンドレジイの別荘で、不意の幸福に見舞われている。『夜明け前の出発』のなかで、グリーンは報告している。

「それはそうと、私の身に、まったくもって突飛なことが持ちあがったのは、この部屋〔ベルトという女中の部屋〕だったのだろうか？ それとも、家のほかの場所だったのだろうか？ 私にはどうしても状況のすべてが思い出せない。しかし次のことは記憶に残っている。私は淡い黄土色に塗った壁のそばにいる。そしてその壁を見てみると、突然、名づけようのない幸福の餌食になるのだ。その幸福は、どこに自分がいるのかももうわからなくなるほど、私を私じしんからひき離す。それは、アンドレジイで休暇をすごす幸福でもなく、子ども時代の幸福ですらない。どこからきたかわからず、風が樹々の間を吹き抜けるように、魂のあいだを通り抜けていく、いわれのない幸福なのだ。その状態は、どれくらい続いたのだろうか？ 私にはまったくわからない。だが私がそれから受けた印象は非常に強烈だった」（V、七一九頁）。

グリーンは、「突然、名づけようのない幸福の餌食になるのだ」と断言しているように、部屋の壁を眺めながら、にわか幸福にとらえられている。この幸福は、「アンドレジイで休暇をすごす幸福でもなく、子ども時代の幸福ですらない」と説明されているごとく、場所と時を超越したものである。それは「いわれのない」（sans cause）幸福だと結論されている。だがこの幸福はほんとうに理由のないものであるか。その幸福が、「どこに自分がいるのかももうわからなくなるほど、私を私じしんからひき離す」とグリーンは述懐している。とすれば、この幸福は、先に取りあげた、ジャンソン校の

るのかわからないままに。今日、私には、この不合理な幸福がおそらく、悪からひき離された人間の正常な状態なのであろうという気がする。つまり人間がもし神のところへ回帰すれば知るであろうような幸福なのだ⁽⁵⁾。

グリーンは、幸福というものを問題にしなから、ジャンソン校の教室で急激な幸福感を味わった体験を告白している。この幸福の感情は、窓の外の「アーチ形の屋根」を目にしたことがきっかけとなって生じているけれども、特別の原因をもたない。それゆえ、この幸福は「不合理な」(irraisonné)ものである。グリーンは自分がとらえられた幸福を、はじめのほうで書いているように、「ほとんど宗教的な何か」とみなし、また、さいごの文で言っているように、「悪からひき離された人間」が、「神のところへ回帰すれば知るであろうような」幸福であったと総括している。この突然の幸福は、悪の支配する地上の国から神の国にもどったときに覚えるはずのよろこびと等価なものと認識されている。

同じ体験は、自伝『夜明け前の出発』においても振り返られている。

「私は教室の中の開いた窓のそばに腰かけていた。そこからは、鉄の小円柱をもつ歩廊の小さなブリキの屋根が見えた。その少し向こうに、褐色のレンガの細長い建物がそびえたっていた。また、葉の萌えだしたばかりのプラタナスの木の枝が認められた。だが私が特によく覚えているのは、ブリキの屋根のほうだ。というのも、その屋根を眺めながら、私は突然、自分じしんからひき離されたから。数分のあいだ、私は、自分の周囲に見える世界とはちがう、別の世界が存在し、その別の世界こそが、真のものだという確信が持てた。そのため、私は幸福を感じた。だがその幸福感を語ることはあきらめる。人間の言葉の表現能力を越えているように思うからだ。私がその時までには知り得た、快いものすべては、比較すれば無に等しかった」(V、六九七―六九八頁)。

この一節では、グリーンが不意に、「自分じしんからひき離された」ような印象をもち、「自分の周囲に見える世界」とはちがった、「別の世界」が存在するのだという確信をいだいて、幸福感に満たされたことが述べられている。グリーンがやにわに覚えた幸福感は、目に見えない世界が啓示されたこと、そして目に見える世界から離れて、目に見えない世界に接近、

のと目に見えるもの、純粹と不純、魂と肉体といった対立概念と同様に、神の国と地上の国、善と悪、神と悪魔といった対立概念が、幼いグリーンの内心に宿り、彼の内心を占領していく。要するに、二元論的な世界観が彼のなかでかたち作られるのである。

二元論的な世界観をかかえることで、グリーンは、後年、きわめて苦渋にみちた生を歩むことになる。しかし母親の存命中は、母親（の愛）に保護されて、比較的幸福感で平穏な日々を送った。グリーンは『夜明け前の出発』のなかで、「母がこの世にいるかぎり、母の存在が、母も私も気づくことができないう仕方で、私を守ってくれたことを私は確信する」（Ⅴ、八〇二頁）と述べている。大ざっぱに言えば、母の現存はグリーンが地上の国に抜け出ることをはばみ、彼を神の国のなかに踏みとどまらせたと判定しよう。

ところで、少年時代の幸福ということと関連して、グリーンは突然の幸福感に襲われた体験を、自伝や『日記』のなかでしばしば語っている。二元論的世界観からは若干話がそれるが、その世界観をますます強固なものにしたと思われるので、次にこの体験を取りあげることにはしたい。グリーンがはじめて、特異な幸福の瞬間を経験したのは、八歳の頃、リセ・ジャンソンⅡドⅡサイイの教室においてである。まず、一九四三年の『日記』のなかの記述を引用しよう。

「私は幸福と自分が呼ぶところのものを、いつか定義することができるかどうか自問している。私は、皆が知っているか、経験したことがある、あるいは経験したと思っっている心理状態のことを言っているのではない。そうではなく、別のもっと特殊なもの、ほとんど宗教的な何か、人を麻痺させる感動について話しているのだ。私がはじめてそれを感じたのは、八歳の頃、ジャンソン校の教室においてであったように思われる。窓から外を眺めていると、低学年の校舎から高学年の校舎へと通じる、屋根付き廊下の、アーチ形の屋根が見えた。その屋根を見つめながら、私は不可解なよろこびにとらえられた。それは不意に私に襲いかかった。私は数分のあいだ、言葉では表現できないその状態の中にとどまっていたと思う。周囲で起こっていることがもはやよくわからず、とりわけ、自分がどうしてこんなにも幸福に感じ

である。グリーンにおいては、すでに、目に見えないものと目に見えるものとの対立、純粹志向を有するために、純粹さと不純、魂と肉体といった対立が観察された。これに加えて、神の国と地上の国、換言すれば、善と悪、神と悪魔といった対立概念が、グリーンの内心で芽生える。そして家庭内の環境は、母が存在するおかげで、自分の純粹さを維持し、幸福と平和を保証してくれるので、グリーンにとっては、善なる世界となり、必然的に神の国という概念を喚び起こすのではないだろうか。

この点にかんして、母親が幼いグリーンに宗教教育を英語でほどこしたことは、注目し値する。「母の宗教は英語であった。したがって、宗教というものはすべて、同様に英語でなければならなかった」(『夜明け前の出発』、V、六六七頁)と子どものジュリアンは了解している。グリーンは自伝第一巻のなかで、幼年時代、両親に連れられて、アメリカ人の教会に行ったときのことを思い出しながら、次のように書いている。

「そこ(アメリカ人の教会の中)にいることは、神の家にいることだと私は教えられていた。そして神は英語を話していた。母が私たちに読んでくれる聖書のなかでも、神は英語で語り、また、毎晩、私がママンの肩の上でそうしていたように、神に話しかけるときも、英語で喋らねばならなかった」(V、六八一頁)。

この文章から、幼いグリーンが、神は英語を話す存在であり、神に話しかける際には、英語を使用しなければならないと判断していたことがわかる。家庭内の環境は、グリーンにとって、母親の現前によって善の世界となることに加えて、神の言語である英語が話されていたことから、当然、神の国となるのである。

では、家庭の外の環境はどうか。神の言語が話されない、家の外の世界は、言うまでもなく地上の国である。それに、家庭内の世界が自己の純粹さを保護し、信仰を固めさせてくれる世界であり、また、幸福と平和をもたらす世界であるとすれば、家庭の外の環境は、自己の信仰と純粹さを脅かし、さらに幸福と安全さを危険にさらす、誘惑にみちた世界となる。この地上の国が悪なる世界、悪魔の棲む世界と同一視されるのは、ごく自然の成り行きである。このように、目に見えないも

打ち砕いた。罪によって、私は人類を見いだした」(V、七三三頁)。

ここでは、純粹志向のためにグリーンがおちいった隔絶した状況が、問題になっている。はじめのほうの、「私の周り」の「一種の禁じられた地帯」(une sorte de zone interdite)は、さうから二番目の文の中の、「魔法の輪」(cercle magique)という語によって言いかえられていると解せる。どちらもグリーンの孤立を指し示すが、この「輪」は、彼が純粹志向を有するがゆえに、他者が自分に接近することを、また、自分が他者のもとに到達することを妨げる、見えない障壁を意味するだろう。この「輪」の形成には、「傲慢さ」が関与しているかもしれない。しかし他者との接触を不可能にする「輪」のなかにとじこめることによってグリーンは孤独を覚える。「私は他の人びとのほうへ、他のすべての人たちのほうへ行きたかった」という切なる願いは、グリーンが深刻な孤独感をいだいていたことを知らしめている。「自分がひとりであると信じる私は、孤独であった」とグリーンは顧みる。「自分がひとりである」と彼が思うのは、自分だけが純粹であると錯覚していたからであろう。純粹さへのこだわりがグリーンに孤立と孤独をもたらした。純粹さと対立するのは、「罪」、すなわち肉体の罪である。「罪によって、私は人類を見いだした」というさいこの文は、肉体の罪を犯すことによって、グリーンがついに、到達すべき他者を発見したことを示唆している。だが罪を犯す以前、グリーンは純粹さへの執着のせいで、他者を見いだし得ず、他者から隔絶したところで、孤独意識をつのらせていた。このように純粹志向は、先に指摘した異邦人意識あるいは南部意識とともに、グリーンの孤独意識を培養する大きな要素となっている。

九 二元論的世界観の形成と突然の幸福

純粹志向と南部意識——これらは母親の影響のもとに生じたものであるが、家の〈内〉と〈外〉との環境が異なることから、早い時期から、二つの世界、二つの国が存在するのだという思想が形成される。二つの国とは、神の国と地上の国と

でかわされるのは、肉体の現実にかんする会話であろう。子どもにとって、性の世界は未知のものであるだけに、いっそう好奇心をそそる。子どもは密かな会話で性の情報を蒐集することによって、人並みに育っていく。グリーンの場合、性にかつわる内緒話を聞くことは、自己の純粹さを脅かすがゆえに、断じてできない。いかがわしい話に耳を貸すことは、危険な誘惑に身をさらすことを意味する。先に引用したように、母親も、「リセで友だちから破廉恥なことを教わってほしくないんだよ」（V、七五四頁）と言つて、息子が性的に墮落することを警戒していた。グリーンが、自分の「誕生の秘密」を、つまり自分がどこから産まれたのかを、級友から吹きこまれたのは、ようやく第五学級、十三歳のときであった（『夜明け前の出発』、V、七二二頁）。自伝によれば、十四歳になるまで、自分のからだを鏡にうつして眺めることもなかった（V、七〇七頁）。グリーンが長いあいだ、肉体的なことがらへの無知の中にとどまったという事実は、彼が学友たちの群れから隔たつていたことをうかがわせる。

グリーンの孤立は、前に見たように、人から触れられることを拒絶し、わずかな肉体的接触すら回避しようとしていたことから察知できる。また、「私は見られることも望まなかった。見られること、それは目によつて触れられることであつたからだ」（『開かれた千の道』、V、九六〇頁）という、青年時代の回想が伝えるごとく、他者の視線が自分に向けられることさえ、忌み嫌うに至るといふ点からも推しはかることができる。純粹志向がもたらす孤立のなかで、グリーンは孤独意識をつのらせる。『夜明け前の出発』のなかで、グリーンは言っている。

「私は純粹だつた。意味はわからなくても、それはすべてを要約する言葉だつた。私の周りには、自分が創り上げた、一種の禁じられた地帯があり、やがてそれが現実存在すると感じられるに至つた。こうしたことすべての中に、傲慢さが占める割合はどれほどだつたのであろう？ とてつもなく大きかつたともいえるし、全然占めていなかったともいえる。私は他の人びとのほうへ、他のすべての人たちのほうへ行きたかつた。それでいて、それができなかった。自分がひとりであると信じる私は、孤独であつたし、孤独から抜け出せなかつた。だいたい時が経つて、罪がこの魔法の輪を

このように、母親は客間の壁に、アメリカ南部の旗の絵を飾って、消え去った祖国をなつかしみ、そして、「これがおまえの旗だよ」と教えることによつて、息子に南部意識を植えつける。その結果、グリーンは早くから、自分の祖国はこの地上には存在しないのだという認識をもつに至る。一九五一年の『日記』のなかで、十二、三歳の頃、母親から、「南部の決定的な敗北の話」を言い聞かされたことを思い出しながら、グリーンは、こうしたためている。

「私の祖国は国家としては、もはや存在しなかった。歴史が祖国を抹殺してしまった。ここから、あの最初の、強烈な、孤立の印象が、私の周りに輪がひかれていくという印象が生じた」。

祖国が存在しないという自覚を、少年時代のグリーンがもつことで、言いかえれば、南部意識を有することで、「孤立の印象」が生じたことが語られている。ここで問題になっている、周りにひかれていく「輪」(cercle)とは、自己を孤独のなかにとじこめる輪のことであろう。このように南部意識はグリーンに孤立感をもたらししている。グリーンがアメリカ国籍でありながらフランスで暮らしたという事実とともに、この地上に祖国が存在しないという認識が、彼における孤独意識をいやましている。グリーンにおいて、信仰はある面で、祖国喪失者、あるいはまた、異邦人＝旅人として生存することの孤独感から解き放つものとしてあるのかもしれない。というのも、信仰に生きるとは、この世的な意味での祖国ではないけれども、もう一つの祖国であり、帰るべき真の住み処である神の国を、全存在を賭けて希求することにはかならないのだから。南部意識が、前述した異邦人意識とともに、孤独感を増幅していることは繰り返すまでもないが、これらの意識が宗教に救いをもとめさせるエネルギーになっていることもまた、異論のないところであろう。

ところで、グリーンにおける孤独意識は、純粹志向とも関連している。母親の性教育によつて、グリーンのなかで、自己の純潔さを保つことにこだわり、肉体的なことがらを敵視する純粹志向が、幼年時代から培われたことはすでに述べた。自己の純粹さに固執すれば、他人とのかかわりで自己を孤絶した状況に追いやるという事態が、必然的に生じる。実際、学校にかよい出したグリーンは孤立する。一般的に言つて、成長しつつある子どもたちの集まるところで、大人たちの目を盗ん

ヴァージニア大学に留学し、ようやく母国の土を踏む。しかしアメリカでは、彼は人びとからフランス人として扱われる。というより、自分がフランス人であると認識せざるをえなくなる。要するに、フランスにあつては、自分がアメリカ人であると感じ、アメリカの土地では、フランス人であることを悟るといったように、どこにいても、グリーンは異邦人の感覚をいだく。グリーンの作品のひとつに、『地上の旅人』(Le Voyageur sur la terre) というのがある。この作品の表題は、グリーンの置かれた立場を暗示している。グリーンはどの場所においても〈旅人〉であり、〈旅人〉のように生きなければならなかった。グリーンは、帰るべき真の住み処を持たない異邦人であった。

グリーンの場合、彼がパリで生まれたアメリカ人であるという事実に加えて、両親が、アメリカの南北戦争(一八六一―六五)で敗北した南部の出身であった³という点も、考慮する必要がある。南北戦争は周知のように、奴隷解放と民主主義の発展とに寄与したと評価されている。けれども、アメリカ南部の生まれである、グリーンの母親にとっては、この戦争は、南部の莫大な富をねたんで、北部の人たちがしかけた抗争であり、北部の挑発を前にして、南部の人びとが自らの独立を獲得するために、英雄的かつ悲劇的にたたかった闘争だった。南部の敗戦の結果、北部との境界線は消滅する。このため、グリーンの母親をはじめとする南部人は、大統領リンカーンにたいして敬愛の念を感じつつも、北部に祖国を掠奪されたような感覚におちいり、祖国喪失者(デラシネ)の悲哀を嘗める。『夜明け前の出発』では、母親がパリのアパルトマンの客間に、アメリカ南部の旗を描いた水彩画を飾り、失われた祖国をしのんだことが追懐されている。

「彼女〔母〕は息子や娘たちを、もはや存在しはしないが、しかし自分の心の中では生きている祖国の子どもたちに仕立てあげていた。母は私たちの頭の上に、この上もなく明るい時間を悲しみに沈める、ある悲劇の影をさまよわせた。私たちは永久に、諦めの悪い敗北者だった。母がよく使う言葉でいえば、反逆者であった。客間の壁を飾る金色の額縁に収められた水彩画には、〈南部〉の旗が、青の下地に十三の星を散りばめた、聖アンドレの大きな十字の旗が見られた。〈これがおまえの旗だよ〉と母は私に言ったものだ。〈これだよ、ほかのじゃないよ〉」(V、六六九頁)。

八 孤独意識

グリーンは幼児期のもっとも遠い思い出として、星空の観照の体験と自我意識の体験とがあつたことは、冒頭で指摘した。前者が幼いグリーンに愛を知らしめ、後者が根源的な孤独感をいだかせたことはすでに論じたとおりである。だがグリーンの場合、孤独の苦悩を、交換不可能な自我をもつという、人間の実存的な苦しみととらえるだけでは、不十分であり、全面的に理解したことはない。グリーンが幼年時代から培ってきた孤独意識には、彼のアメリカ人としての国籍の問題が深くかかわっている。

グリーンはフランスのパリで生まれ、パリで育つたけれども、両親はアメリカ人である。父親の仕事の⁽²⁾関係で、一家は一八九三年、アメリカ南部からル・アーヴルに移住し、次いで一八九七年、パリに転居し、一九〇〇年にジュリアンはそこで誕生した。ジュリアンの家庭では、両親がアメリカ人であるため、当然のことながら、英語が話された。しかし一九〇八年、ジュリアンはリセ・ジャンソン⁽¹⁾ドゥサイイに入学し、フランス語で公教育を受ける。家では英語、学校ではフランス語というように、話される言語の違いによって、グリーンはフランスの地にあつて、異邦人であることを意識させられる。「夜明け前の出発」のなかで、グリーンは、「リセの世界はわが家の世界とは随分ちがつていた。家では、私は両親の祖国にいた。リセではフランスにいた」(V、七〇九頁)と回顧している。学校では、グリーンは、自分がアメリカ人であることを痛感するのである。

だが、この点とともに、グリーンが家庭内でも、異邦人の立場に置かれていたことは、注意を要する。フランス語で学校教育をうけるジュリアンは、家庭にあつては、アメリカ人に囲まれた小さなフランス人であつた。少年時代、グリーンは家の中でも、外でも、異邦人であることを思い知らされる。事情は渡米してからも変わらない。一九一九年九月、グリーンは

ジュリアン・グリーンの出発（三）

井上三朗

目次

- 一 はじめに
- 二 星空の観照
- 三 自我の意識
- 四 悪魔・幽霊の感知
- 五 母親の宗教教育
- 六 母親の性教育と純粹志向
- 七 目に見えるものの誘惑
- 八 孤独意識
- 九 二元論的世界觀の形成と突然の幸福
- 十 母の死
- 十一 おわりに

（太字は今回掲載分）